三島由紀夫の「会計日記」

有元伸子

三島由紀夫の日記といえば、「小説家の休暇」（講談社、昭和三〇年）が著名であるが、これは実際には出版を前提にして書かれた日記形式の随筆文である。公開を意図しないで書かれた日記としては、三島の没後に刊行された「芝居日記」（中央公論社、平成二年）がある。ただし、『マリ・クレール』連載時の原題は「公威劇評集」であり、ノートの表紙にも「平岡公威　劇評集①②」と題されている。戦争をはさんで昭和一七年から二二年まで、若き日の三島が観劇した歌舞伎に関する劇評を書き綴ったものであって、これまた純粋な日記というわけではない。

このように、三島の生活の様子がしのばれる純粋に私的な日記は長らく目にすることができなかったのだが、二〇〇五年に、山中湖の三島由紀夫文学館所蔵資料のなかから、公開を前提としない私的な日記が発見された。それが「会計日記」である。

戦後、三島が流行作家だった太宰治と会い、面と向かって「僕は太宰さんの文学はきらひなんです」と言ったという話はよく知られている（「私の遍歴時代」）。多くの年譜類では、昭和二二年一月二六日のことだとされていたが、三島自身は二一年暮れのことと回想しており、その日付はハッキリとしていなかった。ところが、「会計日記」の記載により、昭和二一年一二月一四日だと確定されたのである（「〇12／14（土）　帰途カマクラ文庫へ寄り／木村氏に原稿みてもらふために渡す／午後四時中野で待合せ。／高原君のところにて酒の会、／太宰、亀井両氏みえらる。／夜十二時帰宅」）。このように、太宰との面会の日取りを確定させた資料として、「会計日記」発見は大きく報道され、二〇〇五年四月から六月まで神奈川近代文学館で開催された「生誕80年・没後35年記念展　三島由紀夫ドラマティックヒストリー」展覧会の目玉として出品された。現在は山中湖の三島由紀夫文学館で展示され、また全体は、さきごろ完結した『決定版三島由紀夫全集』の補巻に収録されており、簡単に読むことができる。

「会計日記」は、「芝居日記」と重なる昭和二一年五月一一日から二二年一一月一三日までの日々の生活が記述されている。三島の大学卒業は、昭和二二年一一月二八日であり、卒業までのおよそ一年半の記録である。執筆当初は、「会計日記」の名のとおり、交通費や購入した本の名前と金額などを書き記す、純粋な出納帳であったが、次第に訪問先や観劇の記録が箇条書き風に加わり、後半には日々の行動がかなり詳しく書かれるようになってい

る。この時期の三島の生活がしのばれる貴重な記録なのである。

通読すると、作家として本格的に活躍するための準備期間に、学生作家たる三島がさまざまに模索している様が見えてくる。原稿の依頼を受け、相応の原稿料を得ており、生活費はどうやら自分の原稿料でまかない、弟に小遣いをやったりしている。文壇への登場のきっかけを求めて、鎌倉文庫の川端康成や木村徳三のもとをしばしば訪ね、作品へのアバイスをもらって改稿したり、「横光さんが「軽王子」をほめてくれた由」（昭和二二年五月八日の記事）などと自作の評判に一喜一憂する。清水文雄や矢代静一などと頻繁に会うために外出し、友人の三谷信などと互いの家を行き来し、手紙のやりとりをしている様もうかがわれる。就職試験に落ちた体験も書かれ、高文試験のための受験勉強を始めたこともわかる。洋書・和書、古典や流行書・雑誌など大量に書物を購入し、朝早くからプレイガイドに行って芝居のチケットを入手し、連日、芝居や映画を見に出かけてもいる。二一年一二月一七日に、「国枝夫人よりダンスはじめて習ふ」の記事の後は、頻繁にホールで習ったりダンスパーティに参加している。

また看過できないのは、私小説的要素をもつ『仮面の告白』との関係である。『仮面の告白』の「園子」のモデルとなった女性との再会の記事もあり（〇9／16（月）邦子さんに会ふ。）、その後の手紙のやりとりも書かれている。『仮面の告白』では、結婚後の園子との再会は昭和二二年梅雨時のことになっているが、実際には二一年の九月だったことが知られるのである。園子のモデルとなった女性との再会についてもう少し詳しく書いた別のノートも発見されており（『決定版全集』第一巻に所収）、ほぼ伝記的事実に即応して構成された『仮面の告白』において、なぜこの件の年立が違うのかについては、さらに考察されるべきだろう。

また、『仮面の告白』では、敗戦後の生活を、「私はあいまいな楽天的な気持ですごした。とおり一ぺんの法律の勉強、機械的な通学、機械的な帰宅、……私は何ものにも耳を貸さず、何ものも私に耳を傾けはしなかつた。若い僧侶のやうな世故に長けた微笑を私は学んだ。自分が生きてゐるとも死んでゐるとも感じなかつた。」（第四章）と書く。だが、「会計日記」からうかがわれる現実の三島の生活は、実に多忙でエネルギッシュである。『仮面の告白』ノート」では「この小説では、「書く人」としての私が完全に捨象される」と注記されているが、芸術家としての生活を捨象して構成した『仮面の告白』と現実の三島の生活との関係も、今後の課題となるだろう。

ともかく、「会計日記」に書かれた若き三島の生活は、およそ書斎に閉じこもって執筆に専念する作家のイメージからはほど遠い。都会での生活を謳歌しながら、作家として大成する道を模索しつづけた若き日の三島がうかがわれる好資料なのである。